

景観フォーラム

巻頭言

イギリス連邦のスコットランドが独立の意思を掲げ選挙に打って出ました。僅差で独立は叶わなかったものの北海道と同じ570万人のこれからの動向は目を離せません。スコットランドといえばスコッチウイスキーを念頭にされる御仁が多い中、俊英若手歴史家アーサー・ハーマンの近著『近代を創ったスコットランド人—啓蒙思想のグローバルな展開』で考究されているスコットランドの首都エジンバラという街が生んだアダム・スミス（1723—1790）とデイビッド・ヒューム（1711—1776）の存在は近代から現代にかけて隆々と聳える連山でしょう。スミスは経済学の基礎を確立し、ヒュームは近代哲学を創造し、ドイツ観念論のカントに与えた影響は測り知れません。

その綺羅星のごとく人材を輩出してきたご当地の人々が、独立国家を表明したということはどういう意味を持つのでしょうか。おそらく、現代における国家という制度に対する異議申し立てではないかと想像いたします。ドイツの事例ではありませんが、拡大してゆく国家というものは悲劇を齎すのに代わって、よりコンパクトなコミュニティはよりコンパクトな幸福感を齎すのではないのでしょうか。デンマークはほぼスコットランドと同等の人口で国家を運営しており、福祉国家の優等生でもあります。シューマッハーの名著『スモール・イズ・ビューティフル』にのっとり、近代を創造した人々から新たに現代を乗り越えようという機運が生まれつつあるのではないのでしょうか。

私たちも良き景観と良きコミュニティの関係をもう一度考え直してもいいのかもしれないし、スコットランド人であるコナン・ドイルの創ったシャーロック・ホームズが現代人の私たちに向けてウィンクしているように思われてなりません。（斉藤全彦）

〈予定〉

景観セミナー

- ・10月22日（水）18：30～20：00
「府中市の景観行政」

景観まちあるき

- ・11月15日（土）府中市内

理事会

- ・10月29日（水）JICA研究所
18：30～

その他

- ・12月17日（水）忘年会

お知らせ

当団体のホームページが11月より新しくなります。
URLは以下の通りです。

<http://www.keikan-forum.org>

今後はこのホームページを通じて、景観フォーラムの情報を配信して参ります。

世界の景観めぐり 第7回

デュポン歴史村とノースウエスト・ランディング (米国ワシントン州)

NPO法人日本景観フォーラム 理事 (株) グローバル研修企画 代表 小林 均

第1次大戦と第2次大戦のアメリカにおける最大の爆薬工場であったデュポン社の工場跡地が、ワシントン州の太平洋岸において、ノースウエスト・ランディングという名の最も注目されるサステイナブル・コミュニティとして生まれ変わった。

約100年前にデュポン社は爆薬工場を造るにあたって、従業員向けの工場町も造った。この工場町はクラフツマン様式のうちの一つのデザインであるバンガロウ形式の住宅からなり、まだ自動車が国民一般の足として登場する前の徒歩圏の町として造られた。この町は1987年に法律に基づく歴史町として保存され、現在も愛着と誇りをもった住民が生活し、町の景観の維持と管理にあたっている。

ノースウエスト・ランディングは、このデュポン歴史町に隣接し、この町をモデルとして開発されたサステイナブル・コミュニティである。サステイナブル・コミュニティとは、アメリカの都市計画家、ピーター・カルソープによって提唱された「そこに住む人々が生きがいを感じ、環境にできるだけ負荷を与えず、安心・安全な生活を世代を超えて享受できる持続性のある生活の場」である。

このサステイナブル・コミュニティを実現するためにノースウエスト・ランディングでは、人々の生活要求に対して高い満足を与え、社会的評価を獲得していた歴史的な町デュポンの都市デザインから、二つの要素を採用している。一つはバンガロウ形式を代表とするクラフツマン様式で建築デザインを統一したこと。もう一つは徒歩圏によるまちづくりと歩車道分離をバックアレーの採用によって実現し、車の目立たない歩行者の視点での風景づくりを行ったことである。ほとんどの住宅は前面に芝生に覆われた広いセットバックを有し、玄関口にはリビングポーチを備え、ガレージは裏のバックアレーに面して目立たないように造られている。

日本の住宅地のように常設のゴミ置き場はなく、決められたゴミ収集日に大きなポリバケツに入れてバックアレーに置いておくと、決められた時間にゴミ収集車が来て、一斉に回収していくというシステムである。そのためゴミ置き場が町の景観を壊している日本とは違い、当然のこととして行われている電柱の地中化とともに、町の美観をそこなう要素が取り除かれている。

サステイナブル・コミュニティは以前に紹介したTND (Traditional Neighborhood Development=伝統的近隣住区開発) とニューアーバニズムという考えで括られるほぼ同じまちづくり思想と考えて良いようです。日本でもこの思想が広まり、美しい景観のまちづくりが行われることを願ってやみません。



デュポン歴史村のバンガロウ形式の住宅



ノースウエストランディングの住宅

グルジアのまちなみ（上）

東野 允彦

「グルジアはヨーロッパか、アジアか、どちらでしょうか?」。ゲストハウスのオーナーは「カフカス」と答えた。そして、アルコール度の高い蒸留酒チャチャをそれぞれのグラスに注ぎ、「カフカス!」。もう何度目になるだろうか、乾杯をした。

約1週間、ほぼ首都トビリシで過ごし、トリビシとその周辺の街を観光した。また、1泊2日でトビリシから数百キロ離れたクタイシへ旅行の中の小旅行をした。まちをぶらぶらする、活動的とはいえない旅行であったが、同地のまちなみについて、今回から2回に分けてその感想を書かせていただきたいと思う。

昨年11月景観セミナー、絵本作家の原田健秀先生の「放浪の画家ニコ・ピロスマニー—永遠への憧憬、そして帰還」で、グルジアに好奇心を持った。あれこれと想像すること半年、夏期休暇を利用して夫婦で旅行した。

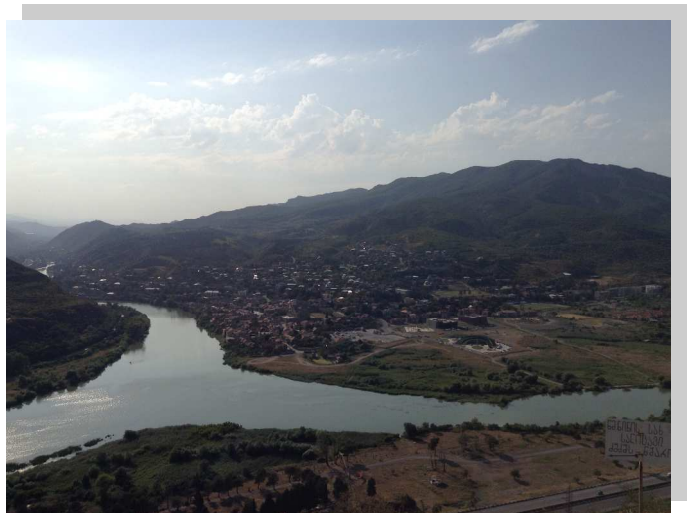
私たち夫婦にとって、外国旅行といえば中国ばかりで、それ以外の国へ行くのは初めて。にもかかわらず、グルジアはどこへ行っても既視感のある国だった。同じシルクロード上にあるからか、2人が留学していた中国・新疆ウイグル自治区と似ていた。あまりにも似ているからか、現地

の人と話す際、自然に中国語が口から出たくらいだった。

8月2日に入国し、8日に出国するまで訪ねた都市は4つ。トビリシほか、クタイシ、ムツヘタ、カズベキ、どのまちも山に囲まれた川岸に栄えた都市。首都トビリシも、グルジア西部の中心都市クタイシも、まちの規模が大きい印象はない。それらは、山頂にある寺院等を訪ねるためにはタクシーを使った方がいいが、ほぼ公共交通機関と徒歩で観光できた。

グルジアの政治や経済についてふれる。トビリシではEUの旗をよく見た。しかし、トビリシ以外の都市で見ることなく、地域によって、政治経済の考えに違いがあるようだ。国の方針について多様な主張があるものの、カフカスの国というアイデンティティーに支えられて成り立っている国のよう。また現在の国際関係から外国語として英語やドイツ語をはなせる人も多いが、年配者はロシア語がわかる人が多かった。

過去に政治が安定していない時期もあり、少し古いガイドブックには治安の悪さを書いているものもあったが、最近は違うようだ。景気はよくないようだが、治安の良さ、なにより人の心の穏やかさやを感じた。この点は新疆ウイグル自治区とは違うところで、とても居心地のよさがあった。





外国人が多く立ち寄る場所では、ポーランド人バックパッカーをよく見た。彼らによれば、グルジアは彼らの身近な外国語も通じ、安く安全に旅ができる異文化を体験できる国として認識されている。

過去、新疆ウイグル自治区の都市をみてから、(国際的に)開けたまちはその時代の国際関係を写す、と思っている。仲のよい夫婦が似るように、影響を強く受ける国のまちなみが反映される。

グルジアと中国・新疆ウイグル自治区の距離はズいぶん離れているし、暮らしに深くかかわっている宗教も違う。シルクロードの都市として共通点はあるものの、まちなみから同じ雰囲気を感じる大きな原因はロシア風の建物。頑丈でまっすぐな建物が要所にドンとたつまちなみ。広場や公の機関の建物としてまちの重要なところに立っているところ、ソ連圏のまち特有の雰囲気を感じる。

ソ連はすでに崩壊していることを体現するように、トリビシではその時代に建てられたとおぼしき建物が崩れながらも立っている。しかも、そのまま使われている建物が多かった。修復するでもなく、壊れていないところを使っている。現在、新しく建てられている建物は、過去のレンガを使った頑丈でまっすぐな建物とは違い、ガラスを使った柔らかさを感じる流線型の建物が多い。



今までになかった新しい建築物をつくる取り組みもよいが、古いものをそのままにしないで活用していくことはこの国の課題だと感じた。グルジアの世界遺産も、多くは危機にさらされている世界遺産リストに加えられている。

今回は、具体的にまちなみを紹介する。
(ひがしのまさひこ・会社員)



「ポーランドとリトアニアを旅して 第1回」

NPO法人日本景観フォーラム 吉川 謙太郎

今夏、勤務校（湘南学園中高）で初めて行う海外ツアーの引率をした。ツアーの正式名称は「早大生と行く！ポーランド（アウシュビッツ）・リトアニアヒストリーツアー」。参加生徒は5名。9泊11日の旅となった。

旅の最大のキーワードは「杉原千畝」。第二次世界大戦中、リトアニアのカウナスを舞台に、迫害から逃れてきたユダヤ人を救うために、外務省の指示に背くかたちで、大量の日本通過ビザを発給した人物である。戦後、外務省を辞めさせられた彼は、鶴沼に住まわれ、お子さんは湘南学園に通われた。人道を基礎とした行動をとった身近な「偉人」を知り、グローバル時代を生きる際のモデルにしてもらいたいという思いが根底にある。

私自身は、昨年の下見に続いて、2度目の訪問となったのだが、このツアーで感じたこと等について、2回にわたり記してみたい。



クラクフ 旧市街 中央公園



まずは、羽田から、フランクフルト経由で、ポーランドの古都・クラクフに入った。クラクフでは、旧市街を中心に散策したが、一番印象深かったのは、「夜の美しさ」であった。中央広場は、歴史的建造物群をライトアップする光だけで満たされていた。所々に暗がりがあり、全体が幻想的ともいえる雰囲気であった。煌々とした光で満ち、何でも見えていけばいいというわけではない。見えないところ、分からないところの存在が、その場の奥行きを深くするのだと感じた。

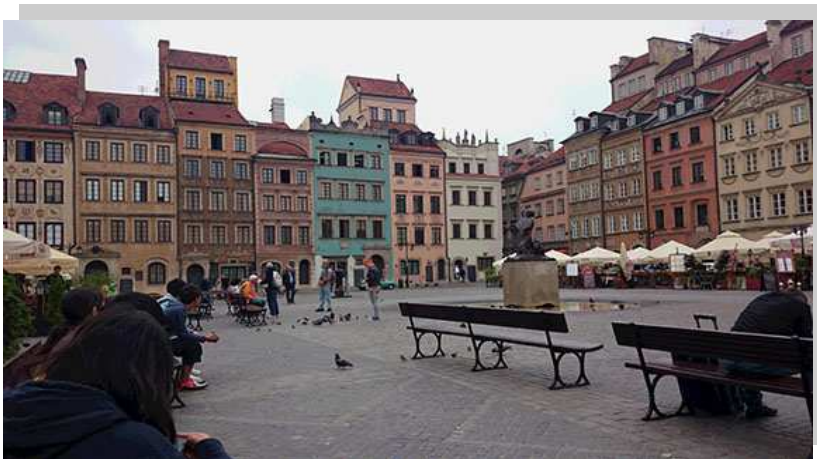


アウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所

翌日、アウシュビッツ再訪。唯一の日本人公認ガイドである中谷剛氏のご案内で、じっくりとみてまわられた。昨年も見ただけの建物や場所であっても、「ここであんなことがあった」と聞くと、当然ながら、見え方が違ってくる。例えば、「ここがメンゲレのいたところ」と聞くと、ただの原っぱが、自分には、ただの原っぱではなくなる。その場の来歴を知ることが、その場の意味を理解するのに重要なことであると、ストレートに体感できた。

アウシュビッツのような、圧倒的な過去をまとっている場以外でも、インパクトの差こそあれ、基本的には同じであろう。見る側の姿勢が問われる。景観について考える際の基本的な姿勢のひとつを、今更ながら、体で覚えたという気がしている。

ポーランド最後の訪問地は、首都ワルシャワ。第二次世界大戦中、ドイツ軍によって破壊された旧市街は、戦後、破壊前につくられていた図面にもとづき、ほぼ完璧に復元されたという。歴史的に多くの苦難を味わってきたポーランドの人々の「強さ」に圧倒され、素直に感動した。生徒たちも「すごい」「信じられない」といった言葉を連発していた。



ワルシャワ 旧市街 市場広場

ワルシャワを離れ、リトアニアのカウナスに向かった。リトアニアでの様子は、次号に記したい。

<LFJブックレビュー40>

『茶色の朝』 フランク・パヴロフ著 ギャロ絵

大月書店 原著初版2001年刊

景観を考えると、ひとは風景という概念に心を向けるのではないだろうか。先ず、私にとっての風景を考え、皆で論ずるときにはそれを景観という概念に置き換えるという仕方だ。即ち、風景は個人的であり、景観は客観性が前提となる。しかし、現代社会の風景はどんなものなのであろうかと問いかけるとき、それを景観とは言わない。それぞれの現代を示す時代精神といえるもの、それをひとは社会の風景と言ったりする。

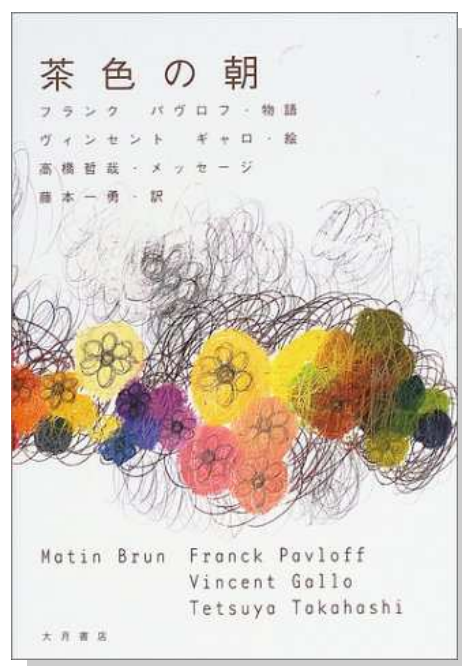
それでは現代日本社会の風景はどのようなものであろうか。日本社会を論ずるとき、戦後の高度経済成長という概念がキーワードではないかと思うが、それを表す時代の風景はどんなものであったろうか。そして、石油危機を乗り越え、バブル景気のあの沸騰したような社会はどのような風景であったろうか。それから失われた20年とか言われる現代に通じる日本社会は一体どんな風景に映っているのだろうか。

フランスでベストセラーになったパヴロフ著・ギャロ絵のこの『茶色の朝』は、ほんの30ページほどの小さな絵本である。それも子供が読むようなものではなく、れっきとした大人が読む絵本である。フランスとブルガリアの二重国籍を持つ心理学者パヴロフが文章を書き、映画監督、俳優、画家、写真家という多彩なアメリカ人のギャロが絵を担当したこの大人の絵本は、まさに現代社会の風景を論じている。

ある国のなかで猫、犬、新聞、ラジオ、本、人々の服装、政党の名前、そして朝までも、何もかもが茶色にそまってしまったらその社会はどのような風景か。「茶色はナチスを連想させるだけではありません。そのイメージがもとになり、今日ではもっと広く、ナチズム、ファシズム、全体主義などと親和性を持つ極右の人々を連想させる色になっています。1990年代に入り、東西冷戦が終結すると、西ヨーロッパでもそれまでのイデオロギー対立が後退し、民族・国民的アイデンティティによりどころを求める動きが強まって、各国各地域に極右運動が台頭しました。」という哲学者高橋哲哉が指摘することは現代日本でも厳然として表れ始めている。現代日本社会は全体主義という歴史を体験した人々が少なくなる中、この「茶色の朝」というものが、物珍しく見える風景となるのであろうか。

歴史は繰り返す、とはよく言われることだが、今こそ憲法9条を持つ輝く市民として、より高い民主主義の理想を世界に問いかける義務があるのではないだろうか。ルネサンスは大いに繰り返してほしい歴史であるが、全体主義はご免こうむりたい。

(斉藤全彦)



天地玄黄 ③「この国のカタチ - 風土千年の気風と気概はこの国に根差すか」

筆： 安倍偶像

このフォーラムに関わられている方であればご存知のように、フォーラムの設立趣旨文は「景観十年、風景百年、風土千年といわれている。」から始まる。

さて、どのようにして、この十年、百年、千年を積み上げていくか。
そこには、経済状態にまつわる観点、ということも（残念ながら？）切っても切り離せないと考える。
（国家的な観点からも個人やその集合としての観点からも、である）

といったところから、経済状態にまつわる話から入っていき、景観という話題に最終的には「接合」させて行きたい。

小生が何故このような切り口やテーマで筆を取ろうと思ったか。それは、とある経営者の方との会話に端を発す。

その方は、大枠をまとめると次のようなことを宣われた。

「今、自分は会社を経営しているが、後進のことなどは関係ない。自分の代が気持ちよければ良いのだ」と。

業種、業界はボカすが、教育分野のような後世に影響を及ぼすような分野を対象とされている方であり、これを聞いた時には開いた口がふさがらなかったというのが正直なところだ。（因みに教育分野ではない）

「これでは百年、千年はおろか、十年も積み上がらない」 そう危惧して取った筆である。

先の経営者の発言を受け止め考えてみて、それに比して思い浮かんだのは孫正義氏のことである。

氏については好みも別れ、小生も評価軸は定まっていない。が、3.11震災後 太陽光発電などのクリーンエネルギー推進に私財を投じたりしている点は評価出来、経営者としての志など、格の違い、徳の違いを感じざるを得ない。

氏を好まない向きには、稲盛和夫氏あたりも挙げておきたい。かねてから「無私の姿勢」を説いておられた氏であるが、ここ最近では日本航空再建のための仕事を無給で請け負われていたことが思い浮かぶ。こちらも徳の深さに脱帽である。

さて、経済について、であるが、まず上記のように、後進・後世を慮れば「アベノミクスとはこれ愚策なり」とまず一刀両断しておきたい。

小生がそう断じるに依拠しているところは、いくつかあるが、捉え方はシンプルだと考えており、基本的には「(1) 対 GDP 比 200%超 に膨張し、年国家予算も概算で半分は国債 [つまりは借金] に依存する巨額な財政赤字」「(2) 企業寄りの各種経済政策」といったところが主だって注視すべき、と考える点である。

※ 上記を掘り下げる情報源は紙幅の関係で一部しか挙げられないが例えば (1) については『「デフレ脱却」は危ない アベノミクスにつきつけられるジレンマ (技術評論社, 2013.4)』、(2) については『日本の景気は賃金が決める (講談社現代新書, 2013.4)』 辺りを掘り下げられてはどうかと思う。

後者書籍に関しては、これが世に取り上げられ出してから、安倍具象政権も「賃上げ」について騒ぎ出したように思う。

他には「アベノミクスに4つの誤算、円安のデメリットが顕在化」をそのままインターネット検索に掛けてみるのも良いだろう。(2014.8 下旬の日経ビジネスオンラインの記事に行き当たるはずである)

ここで指摘しておきたいのは、「この国の未来のカタチ」を決める重大な1要素である経済政策についても、この国の政策決定者たちは先述の経営者のアタマと同じである。つまりは所謂「80年代後半バブル」そこからの「甘い蜜の味」が相当忘れがたかったらしく、同じ構造では起こり得ないその「影」を追っているように見えて仕方がない。

後進・後の世代は関係ない。「自分たちの代だけ気持ち良ければよい」のだ。

昨今色々この国では論点を間違っている、と思うことが増えてきているように感じている。例えば「正規雇用か非正規雇用か」といったものである。

これについて、正しい論点設定は、まず「仕事とは何か」「仕事の質とは何か」であり、要は創出される成果に目を向けることであり、それに雇用形態など関係なく報奨されるようにすることである。

こうした論点設定を導けないのは、「効率良い解」を自分で導き出させるならまだしも、手順を暗記させてしまうような教育システムに拠ると考える。つまりは「何故を問うて、自分なりにそれに対する答えを形にする」ような訓練がこの国の教育システムには乏しい印象を抱いている。因みに、雇用形態に関係なく、同一労働同一賃金のような仕組みを構築している国にオランダがある。(例えば『日経ビジネス』誌 2014.2.10号 特集「働き方革命」記事 参照のこと)

教育の国別のスタンスについて掘り下げると、例えばアメリカは、実は日本に比して、より本質的な意味での超高学歴社会である。そこでは、より高位の大学院プログラムの内容、またそれを経て得た学位の重みが尊重される。

(日本のように「入口」つまりは入学試験を通ればかなりの程度 呆けていても卒業でき、社会で受け入れられている「難関大学」出身であるほど優遇される、という「入口」後のプロセスの質を問われない社会とは異なる)

メリハリという部分もあろうが、2020年 東京五輪に絡む、新東京国立競技場建設問題などは、「景観十年、風景百年、風土千年」に考量を加えるには、また、この国の民度(権力者におもねず、草の根から発信すべきことは発信する)を測る良い試金石なのではないかと思わざるを得ない。

こうした事どもを考えながら、景観フォーラムとのお付き合いも考えて行きたいところである。

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <http://www.keikan-forum.org>

